



医療福祉・在宅看取りの地域創造会議 通信 第81号

(R2/7/10)

第85回ワーキンググループ会議Web (令和2年6月18日)



「本人のQODに寄り添うとは」

花かたばみの会 代表/介護保険認定調査員 井川 裕子 さん

大切な人が、最期の時間をどの様に過ごしたいと考えているか、それを100%理解して共に過ごすことは難しく、一生懸命介護しても自己満足で終わってしまうかもしれません。それでも、最期に「良い人生だった」と思ってもらえるように、気持ちに寄り添いながら過ごすことはお互いにとって大切なことです。

今回は、ご両親と妹さん、大切な3人の方を見送られた井川さんから、ご自身の経験をもとにお話しいただきました。



事務局ではスクリーンを設置し、県庁内の会員に参加していただきました

QOD

(Quality of death
または Quality of
dying)

「死の質」と訳され、いかに満足して死を迎えるか、という終末期の質を表している

QODの質を高めるために・・・

「死に場所」「死に方」を考え、さらに人生の振り返りや遺言や墓の準備をし、家族や仲間とのコミュニケーションをとることが大切



息を引き取るときに一緒にいることは意外と難しい。それまでの過程をどんなふうに一緒に過ごしたかということが大切

知識があることで本人の思い・願いを遮ってしまうこともある。本人が望むままにすることが寄り添うということではないか

自分の思いをエンディングノートなどに書き留めておくことで、介護する者は、その人のQODに寄り添うことができる。尊厳死とはそういうことではないか

参加者より

- ・看取りに至るまでの経緯、もっと遡れば、お互い健康なうちの「今」からの関わり合いを大切に過ごしていくべきと感じました。
- ・どこでどのように死を迎えたいのか、その人の気持ちに寄り添っていく。言葉では簡単に聞こえますが、いざ自分は井川さんが言われるように寄り添えるのか…とても考えさせられました。これからはその人やその人が今まで生きてきた人生、考え方に好奇心を持ち、寄り添えるようになりたいと思いました。
- ・人生観や死生観の中で大切にしているものは何か(家族との時間・痛みや苦痛がない・ペット・社会貢献等)を判断能力の如何に問わず生前から知っておき、定期的に確認や更新しておくことが、故人・遺族にとって大切だと思います。
- ・本人、家族の意向にあった支援が大切。寄り添いが必要な方、一定の間隔を求めている方と様々。その人に合わせていきたい。
- ・看取り難民が増えつつある時代、地域への啓発が足りていないとケアマネさんから聞きます。包括としてできることを考え、他機関と連携して、地域で看取りができる体制づくりに取り組みたいと思います。
- ・若い世代にとっては、話をお聞きしながら気持ちに寄り添うしか方法がなく、今回の様に看取りをした方が語り部さんのように口頭伝承される機会があればまたお聞きしたい。
- ・ACPの啓発をするにあたって、本人の望むことを知っておくこと、QODに寄り添っていくことが大切だと伝えていきたい。



医療職、介護職、行政書士、司法書士、県・市の行政職など約37名の方にご参加いただきました。

井川さんご自身の言葉で語られる経験談に、参加してくださった皆さんは引き込まれたのではないのでしょうか。ホームページの「みとりちゃんTV」で公開していますので、ぜひそちらをご覧ください、再度QODについて考えていただければと思います。

【第86回ワーキンググループ会議】

テーマ：

「ケアマネジャーが実践している利用者の意向を尊重した支援とは」

話題提供者：

社会医療法人誠光会 居宅介護支援事業所きらら
介護事務局 副局長/所長 森本 清美 さん

日時：7月16日(木) 18:30~19:50

第1部 挨拶&講義

第2部 質疑応答 等



総会のご案内

8月30日(日)に開催予定です。開催方法等については現在調整中です。決定次第メーリングリスト、ホームページ等でお知らせしますので、もしばらくお待ちください!

ご意見等お待ちしております!

医療福祉・在宅看取りの地域創造会議運営事務局(滋賀県庁 医療福祉推進課内) 金岡・西浦
TEL:077-528-3529/FAX:077-528-4851/E-mail:info@chiikisouzoukaigi-shiga.jp